

医療タイムス

週刊医療界レポート

2011.9/12 No.2027

特集

被災地で見た曙光 石巻市を訪ねて



タイムスインタビュー

救急救命士の職域拡大へ取り組み
医療専門職としての成長を目指す

一般社団法人日本救急救命士協会会長
帝京平成大学健康メディカル学部講師
熊野神社 禰宜
法務省東京保護観察所 保護司

鈴木哲司氏

タイムスレポート

地域の産婦人科医療を守る
病診連携システム“大塚モデル”

モバイルヘルスケアは医療ITの進歩でここまで進んだ

〇…「IpadやAndoroid端末などモバイル機器とクラウド技術の組み合わせで、医療ITの進歩は驚くべきスピードで医療現場を変えている。モバイルヘルスケア時代の到来である」。8月27日東京・品川のコクヨホールで開かれた「モバイルヘルスケアシンポ



約300人参加したモバイルヘルスケアシンポジウム会場(8月27日東京・品川コクヨホールで)

ジウム2011」には昨年の100人をはるかに超える300人が参加、病院現場から、また関連業界から17に上る演題が出され、午前9時半から午後6時過ぎまで、熱心なモバイルヘルスの実践・発表と新技術の公開があった。主催したのはITヘルスケア学会「移動体通信端末の医療応用に関する分科会」(水島洋会長：国立保健医療科学院上席主任研究員)。シンポジウムの実行委員長として「今回はバラエティに富んだ事例発表や今後の携帯情報端末普及のための提言があり、非常に実りの多いシンポジウムになった。最近のスマートフォンの普及により接続性や操作性がより向上し、モバイルヘルスは医療・介護現場を大きく変えていくだろう」と総括した。この日の基調講演は「国際競争下の日本のICT動向～移動体通信技術を中心にして」YRP研究開発推進協会会長の甕昭男氏、特別講演「クラウド・モバイル時代の医療ITの変容」国立成育医療研究センター情報管理部情報解析室長の山野辺裕二氏、招待講演「医療をモバイル化するとどうこと～世界初のIpad手術から学ぶ医療革新」神戸大大学院消化器内科特命講師の杉本真樹氏、指定発言「医工融合ICTにおける電波法、薬事法の解釈」フェアネス法律事務所一などがあった。

〇…この日、特に注目された演題の1つは、73歳になる東京都千代田区ケイ・クリニック瀧澤清氏の「遠隔医療システムを活用した在宅医療」。これは進化するITを利用し、山村の遠隔地の在宅患者との心電図送受信とその解析法を進めている事例。心電図用センサーから出てくる情報を送受信する仕掛けで、これと情報を解析するソフトがあれば、どんな



瀧澤清院長

不便なところに住んでいる高齢者でも日々の安全の確保ができる道筋をつくったもの。瀧澤氏は慶應義塾大学医学部卒。1989年から6年間長野県下伊那郡上村のへき地診療所長として赴任、この間、パソコン通信を活用した遠隔医療の実践に取り組んだ。高齢者から毎日「今日は元気でした」のひと言が電話回線を通して送られてくる。これが瀧澤氏の遠隔医療ITテクノロジー開発の原点になった。現在、瀧澤氏は遠隔医療に進化するITを利用して、在宅患者の心電図送受信と新しい解析方法の開発を進めている。日本と中国ではすでに特許取得、米国、EU、オーストラリア、韓国、インドは目下特許承認待ちという。「日本の年間医療費は35兆円。これにはかなりの無駄使いがある。心電図テレメトリなどのITバイタルモニタリング・システムを利用した遠隔医療を駆使すれば、少なくともみて1%抑制できれば3000億円の節約となる。現在、心電図システム応用をパートナー企業と組んで挑戦中です」と意気盛んだった。モバイルヘルスケア、医療ITは身近なところでも進んでいた。医療・介護現場は変わりつつある。